法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

わが”逸脱体質”

小笠原, 賢二 / OGASAWARA, Kenji

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
49
(開始ページ / Start Page)
112
(終了ページ / End Page)
112
(発行年 / Year)
1994-03-15
(URL)
https://doi.org/10.15002/00019740

わが〝逸脱体質〟

小笠原　賢二

私が法大に在籍したのは、修士課程を含めて九年にわたった。即ち、一九六六年から七五年までである。研究に熱中しすぎたためではない。今から思うにどうやらそれは、しばしば道草を食ったり、廻り道をしたりしすぎる私の〝逸脱体質〟のせいだったらしい。六〇年代後半から七〇年にかけての全国的な学園紛争という時代状況の影響も、もちろんある。

しかしなにも、紛争の最前線で戦ったなどというのではない。事態は逆で、一介の苦学生だった私は、アルバイトに大半の時間を取られて、学校にいる時間はさほど多くはなかった。全共闘に共感を抱いてはいたが、生活の方が大事だった。

運動を横目で見ながら、小田切秀雄先生のゼミを中心とした二、三の授業にはよく顔を出した。それだけでもかなりきつかったが、ゼミにさえ出ないのでは、大学に来た意味がないと考えていたのである。ゼミでの収穫を広げる形で私は、むしろ一人で勉強していた。

そんな中からいささかの問題意識を持ち始め、四年になってにわかに修士に進みたくなったが、なにしろそれが、〝七〇年安保〟の年である。

闘争の拠点の一つになっていた法政の学内では、六八年頃からしじゅう、スピーカーによる演説が飛びかい、党派どうしの衝突がくり返され、機動隊の導入もあり、流血に至ることもしばしばだった。そのため休講も多かった。状況に対して、各人に明確な姿勢を求めるような雰囲気が強かった。クラスごとの討論もしじゅう行われた。そんな時に卒業してすぐさま修士課程に進んで勉強を始めるには、ためらいがあった。

北海道の実家で農業を継いでいる兄が病気で入院したのはその頃だった。働き手がいないというので私は、一年間だけ実家の手伝いをすることにした。大学院への入学手続きとほとんど同時に休学届けを出したのは、そんな事情からである。

しかし農業は甘くない。五月の田植えから始めて、収穫までのほとんどをこなしてくたくたになった。法政の至近距離にある市ケ谷の自衛隊で三島由紀夫が自死した十一月二十五日は、馬を使って田に肥料を運んでいた。昼休みのテレビでそれを知ってやりきれない気分になり、翌朝まで酒を飲み続けた。

年が明けて再び上京したが、その年の五月には高橋和巳も病死した。関心を持ち続けてきた二人の作家の相次ぐ死には、いろいろ考えさせられたが、それを忘れるように、アルバイトと勉強を再開した。

ところが、である。アルバイトのつもりだった書評新聞の編集の方に大幅に時間をとられ、同時に熱中し始めた。ついには大学院に籍を置きながら、正社員になってしまった。そのことで生活は保障されたが、学校の方はおろそかになった。〝逸脱体質〟が、またぶり返した。それは以後もまだまだ続いて、現在に至っている。この先、どうなるのか。

〝逸脱〟も楽しいけれど、ほどほどに。

（一九七五年修士課程修了・文学部講師）